

ヒマラヤ

No. 289



1995 DECEMBER



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

H A J から募集のお知らせ

30周年記念行事

本会は2年後の1997年10月に創立30周年を迎えます。これまでも節目ごとに記念行事が検討されましたが、これまでは諸般の事情で実施されるまでには至っていませんでした。

本年5月27日開催の理事会に於て、30周年記念を迎えるにあたって「**①諸外国からのゲストを迎えての行事・式典**」、「**②H A J 30年誌の発行**」、「**③記念野外活動（登山を含む）**」の3項目について常務理事会で分担して進行することが決定されました。

現在のところ常務理事会の分担としては、**①**を八木原常務理事、**②**を山森専務理事、**③**を尾形常務理事がそれぞれチーフとなって進めることになりました。

そこで会員の皆様からそれぞれの項目について提案、アイデアを募集致します。特に所定の用紙はありませんのでH A J事務局宛郵送・F A Xでお寄せ下さい。

合同登山隊員

H A Jではチベットと合同登山を協議中ですが、目標の山については、2～3に絞っていますが、対象は7千メートル以上の山で、あまり登山記録のない山、日本人未登の山、未踏峰です。隊員数など状況が許せば複数の山も考えています。

合同登山は立場の違いを理解してはじめて成り立ちます。今回の合同は特に合同でなくとも許可取得できる山です。

情報の少ない山で異文化の民族との合同登山の実践を希望する真摯な岳人の応募を期待します。

記

1. 登山期間予定：1997年春
2. 場所：中国、チベット自治区ヒマラヤ山脈
3. 個人負担予定額：100万円程度
4. 募集人員：10名
5. 資格：冬山5年以上
6. 申込み先：H A J事務局宛

表紙写真

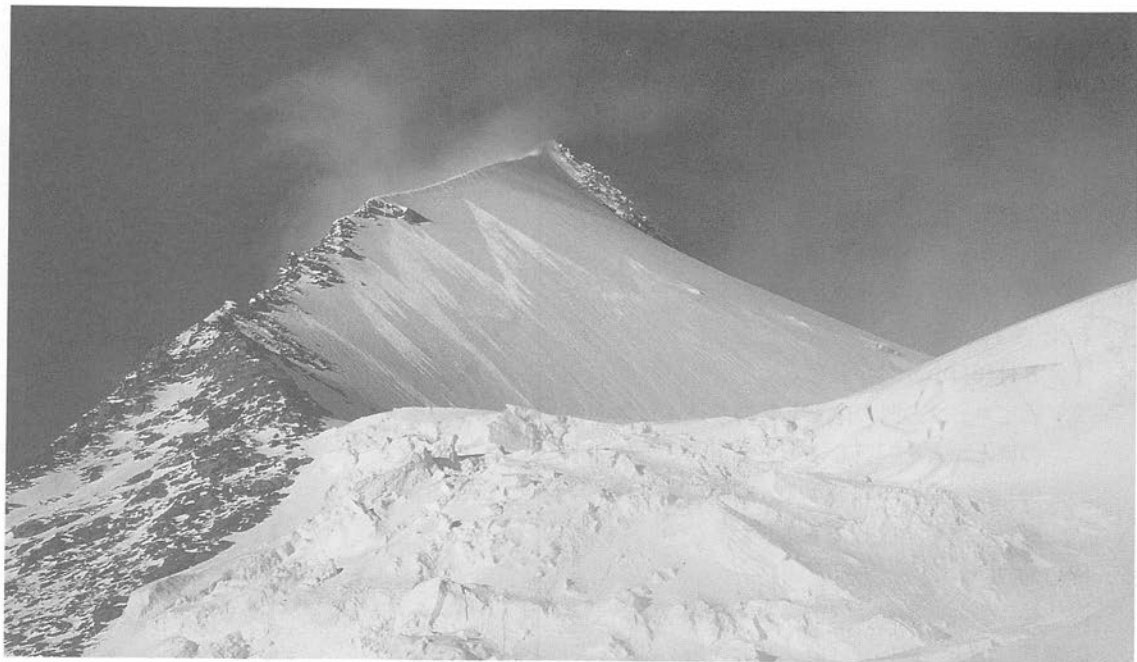
5時30分スノープラトーのC2を後にして西稜に向かう。西稜のコルに到達する頃には青空の中にヌンの頂が見える。振り返ると眼下にキシトワールの盟主シックルムーンをはじめ、ブラマーI峰などの山なみが眺められた。

(中川 裕)

ヒマラヤ No 289

- | | |
|-----------------------------|-----------------|
| 1. カシミールの女神 ヌン峰登頂 | H A J ヌン登山隊1995 |
| 17. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス〉 | |
| 20. 中国高峰登山小史(8) | 山森欣一 |
| 24. 寸感・事務局日誌 | |

カシミールの女神 ヌン峰登頂



HAJ ヌン登山隊 '95

はじめに

日本ヒマラヤ協会では、会員の様々な要望に応え、休暇の取りやすい夏期に、比較的短い期間で登れる山を目標としてサマー・キャンプを実施してきました。今年度計画されたものは、インドのヌン峰（7,135m）をはじめとして、中国のムスターグ・アタ（7,546m）、玉珠峰（6,179m）の3隊でした。しかし、諸般の事情から、後者の2隊は不成立。そちらを希望していた会員をヌン隊に吸収し、今年のサマー・キャンプは1隊11名での実施となりました。

ヒマラヤ協会がヌン峰に登山隊を派遣するのは、今年で実に8回目となります。一つの組織として、ヒマラヤの高峰にこんなに多くの登山隊を送るのも希なことです。

当然、協会に蓄積された高所登山のノウハウを生かせば、多くの隊員の可能性が期待できるはずです。西峰からヌン登頂、ならびに、「テイクイ

ン・テイクアウト」の実践を通して環境への配慮にも心がけることを隊の目標として彼の地に渡りました。

過去のヌン隊を振り返ってみても、順風満帆と言いますか、なんの支障もなく登山を終了し帰って来た隊は無いようです。そこにまたインド登山の特殊性があるのでしょうか。楽しさがあるのでしょうか。

今年も、紆余曲折のあった登山でした。…

2日遅れでBC入りしましたが、登山期間は20日間の前半は、降雪のある毎日でした。後半6日間は雲ひとつないような、快晴の日々でした。その晴天の最終日8月16日に、4名の隊員が頂上に立つことができました。

今年のサマー・キャンプは我隊のみと言うことで、協会の会員諸兄、ならびに各方面から多大のご支援・ご援助をいただきました。ここに謹んで御礼申し上げると同時に、登山の概要を報告いたします。

（記：酒井 國光）

隊の概要

1. 目標の山

ヌン (Mt. Nun 7,135m)
インド、ジャム&カシ米尔州

2. 登山期間

1995年7月23日～8月27日 (37日間)
(先発2名7月17日出発・残留2名
8月31日帰国)

3. 登山の目的

- 1) 西稜からのヌン峰登頂
- 2) テイクイン、テイクアウトの徹底

4. 結果

- 1) 8月16日、4名が登頂。
- 2) 固定ロープ以外の隊として持ち込んだ物のほとんどを回収して街まで下ろして処分した。過去の隊のゴミ、回収可能な残置ロープも回収して下ろした。

5. 隊の構成

隊長	酒井 國光	(56才)	茨城
副隊長	樋上 嘉秀	(51才)	大阪
登攀士	中川 裕	(34才)	東京
隊員	中村 喜吉	(48才)	北海道
"	山岸 喜世	(47才)	神奈川
"	東條 利文	(44才)	三重
"	牧野 総治郎	(41才)	東京
"	中島 清治	(40才)	埼玉
"	安藤 斎	(36才)	福島
"	阿部 訟二	(31才)	埼玉
"	中島 俊弥	(30才)	長野

連絡官 ラビ・クマール (28才)

コック 1名

キッチンヘルパー 2名

ハイポーター 3名

ガイド アルン・クマール (28才)

行 動 記 録

先発隊・波乱の出発

7/16

樋上副隊長と中川は7時30分にサンシャインブ

インド周辺概念図



リンスの前よりリムジンバスで出発。成田より予定どおり出発の予定であったが、我々の乗るべき飛行機は未だにボンベイを飛び立っていなかった。取り敢えずカウンターで昼食券をもらい、食事の後全日空ホテルへ。そして夜、10時35分、ついさっき成田に到着したばかりのインド航空301便に乗り込む。整備もそこそこに飛行機は慌ただしく滑走路へと向かった。時計を見ると既に11時、嫌な予感がした。しばらくすると機長からのアナウンス。成田空港の騒音防止条令により離陸許可が下りないとのこと。真夜中の機内食のサービスを受け、再び日付が変わった全日空ホテルへ。インドに行く前からこのトラブル。先行きを暗示させる一日となった。

7/17

24時間遅れでインド航空301便は成田を飛び立った。定刻にデリーに到着。シカール社スタッフの出迎えを受けジャンパト・ホテルへ、2年ぶりのデリーの車の増加に驚かされる。ホテルに着いても案内された部屋の冷蔵庫やテレビ、シャワーが

壊れていたりで2度部屋を変わる。夕食は会津山岳会の皆さんと。彼女たちとは以後、IMF・通関と行動をとにする。

7/18

本日より樋上副隊長はシカール倉庫でデポ装備のチェックと梱包、中川がIMFでの諸手続き、日本より送った隊荷の引き出しを行なう事とする。

IMFでは隊長以外でのブリーフィングは認められないと言われる。現在のIMFは責任者が空席で事務官がやけに威張っている。仕方なく承諾し、隊長とL・Oには一日遅れでレーにフライトしてもらう事にする。全隊員の‘X’ビザの取得の確認のために、日本からパスポートのコピーをFAXで送ってもらい、午後からカーゴ・ターミナルへ向かう。インド航空の事務所に行きデリバリーオーダー等を受け取り、隊荷がコマーシャル・カーゴ・セクションに在ることを確認する。

通 関

7/19

今回、我々は隊荷をコマーシャル・カーゴ・セクションから引き出す。今までのアナカン（パーソナル）の手続きとは大分違うだろう事は予想していた。ニュー・カスタム・ハウスというカーゴ・ターミナルから少し離れた場所にあるビルで事務手続きはおこなわれる。そして、予想どおり登山隊の隊荷に対する免税措置など誰も知るはずがなく、シカール社のスタッフも初めての経験のため要領をえずに時間だけが過ぎて行く。ビルの中を走り回ったすえ、本日の通関を諦めシカール社へ、明日は通関の専門業者を頼むことにする。

7/20

樋上副隊長は引き続き倉庫へ、中川は午後よりニュー・カスタム・ハウスへとむかう。午前中にシカール社のスタッフと専門業者スタッフによって書類が整備された。

専門家の応援を受け着実に前進をし始めた。夕方にはニュー・カスタム・ハウスでの手続きを終了しカーゴ・ターミナルへ、100%の検査を条件に無税での輸入が認められ、業務終了間際に荷物の検査を終えた。本当に全ての箱が開けられて細かな検査が行なわれる。会津山岳会は女性隊と言

うこともあり(?)半分くらいで済む。

荷を引き出すことは出来なかったが漸くめどがついた。

7/21

今日は保管料を払って引き出すだけなので、シカール社のスタッフに通関の方は任せ、2人で倉庫へ、食料等若干の買い出しをして隊荷の到着を待つが予定の時刻を過ぎてもやってこない。ホテルに帰り心配していると16時過ぎに到着。17時、我々の荷とハイポーター3人を乗せたバスは出発していった。

——— 通関顛末 ———

今春、シッキム・シニオルチューに向かった東北大隊より今年4月1日からアナカンには80%の税金がかかる、との連絡が入った。東北大隊は特別許可でクリアしたが、我々にはそれも通じないだろうと覚悟をしてインドに向かった。まずインドへの個人輸入には一律に80%の関税がかせられるとのことで、コマーシャル・カーゴ・セクションに荷物を送った。

インドに着いてからは最初に荷物を輸送した会社の事務所（ほとんどの事務所は空港の近くのエア・カーゴ・ターミナルの2階にある）に行くのは従来と同じであるが、以後の手続きは1km程道を戻ったニュー・カスタム・ハウスで行なわれる。商業輸入を扱っている場所である。

さて、登山隊の隊荷の免税措置は税関の役人が持っている法律集の一般免除の部、No21、5項に記されている。これを、示さないことには登山隊など相手にはしてくれない。ここで、IMFからのアンダー・テーキング、無線機の輸入許可証、パッキング・リスト等を添付して所定の書類を作成する。ただし、パッキング・リストの全品目に関税率(C・H・T)を記す必要があり、その場で記入するのは不可能である。今回我々は2日目から専門の業者を頼んだが、分類するのにシカール社のスタッフと2人で半日を要した。また、全てフリーハンドで記入された書類は商業輸入の常識には適わないらしく、常に文句を言われた。また、アナカンに比べると記入する書類の量も、サイズも、サインをもらう人間の数も2倍以上だ。

書類が揃えばカーゴ・ターミナルに向かい検査を受け、保管料を払い引き出しとなる。

おそらく、我々の隊が、商業部門から法律に基づいて隊荷を免税で輸入した初めての登山隊と思われるが、今回はニュー・カスタム・ハウスの所長とコーマーシャル・カーゴ・セクションの検査の責任者（二人ともアシスタント・コレクターで女性）に頭を下げてお願いし、名刺に裏書きをしてもらうという努力も必要だった。100%の検査を条件に輸入が認められ、また実際に、我が隊の荷物は全て開けられリストとの照合が行なわれた。ちなみにT・B・R・Eは記されていない。

そして、商業輸入を扱っているだけあって話が通ればスタッフは皆テキパキと仕事をし、倉庫など思いの外スムーズに仕事が運んだ。アナカンの時とは異なる感じがした。尚、我々以降の隊は皆順調に処理出来ているようである。エージェントとの緊密な連絡が重要である。

7/22

先発の仕事もほぼ終わり、少しゆとりが出来てくる。ただひとつホテルが気に掛かる。ジャンパト・ホテルは両替の時もお金を誤魔化そうとするし、設備も悪くチップの要求もはなはだしい。前回利用した5年前とはえらい違いで、サービスが低下している。この件をシカール社に相談して他のホテルに移ることになり、午後ジャンタル・マンタル前のパークホテルへ。なかなか近代的なホテルである。夕食はリエゾンオフィサー（L・O）のラビ・クマールさんと。顔中に髭を生やした彼は、カメットの登頂者であり昨年秋のインドのクライミングコンペのチャンピオン、インド南部のバンガロール出身の28才、仕事はなんとクライミ



▲レーの街にて

ング・インストラクター。登頂意欲満々である。

7/23

午前中観光、パハール・ガンジ等に行く。夜、予定どおり本隊を迎える。

ラダックへ

7/24 曇り デリー→レー

酒井隊長とL・OはIMFでのブリーフィングの為にデリーに残り、他の隊員はレーへフライトする。暗いうちにホテルを出発して空港へ、5:50の予定のフライトはレーの天候不良の為2時間ほど遅れて出発。岩尾根をかすめるようなスリルあふれる着陸で、9時に無事レーの空港に到着。いきなり3,600mの高度に連れてこられると流石にこたえる。高鳴る心臓と、少々ばやけた頭を気にしながら、2年前と同じH A Jとはお馴染みのホテル・リンジにはいる。

昼食を終えると各自思い思いに街に出掛けて行く。

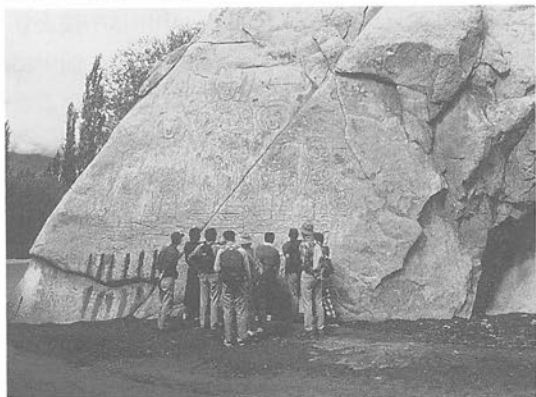
7/25 曇り→一時雨 レー滞在

昨年来ている中島（清）隊員以外の9名はラダック観光へ。シェイ、テイクセ、ヘミスのゴンパを廻る。ガイド役のラダキー（ラダック人）の民族衣装を着た若者が流暢な英語で一生懸命説明してくれるが、これまた、我々の頭を流れるように去って行くその言葉を、十分に理解できないのがとても残念であった。

酒井隊長とL・Oも予定どおりレーに到着。

7/26 曇り時々雨 レー→カルギル

7時30分バスにて出発。途中、軍隊の移動にも出会わずラマユル・ゴンパにも立ち寄らずに先を急ぎ、午後7時前にカルギルのホテル・ゾジラに



▲シェイ・ゴンパ下の五仏像

到着。途中のチェックポストの脇で売っていたコバニーがとても美味しかった。夕食まで時間があるのでカバブを食べに中川と中島（俊）は街に出掛ける。夜より雨音が強くなる。

陸の孤島

7/27 雨 カルギル滞在

激しく雨が降る中を出発、スル川は河幅いっばいに増水している。11時前、路がスル川の右岸に渡ったところで土砂が路を塞いでおり引き返す。また、我々のバスの道路許可証の期限が今日までしかなく、代わりのバスも探さなくてはならないためにカルギルに戻る。なるべく安い場所に泊まろうと考えたが、全ての道路が不通となったカルギルは言わば陸の孤島、どこのホテル・バンガローも足止めされたトレッカーや旅人でいっぱいである。仕方なく高くつくがホテル・ゾジラにベッドのみの条件で泊まる。

夕食からは我が隊のキッチン・スタッフの作った料理となる。ホテルの料理よりも美味しく好評であった。

7/28 雨後曇り カルギル滞在

今回のガイドは91年隊も世話になったアルン・クマール28才。英国人の妻を持ちオーストラリア

に住んでいるという変わった経歴の持ち主である。父親はインド陸軍D・Gとか。彼とL・Oで道路状況の偵察に向かう。

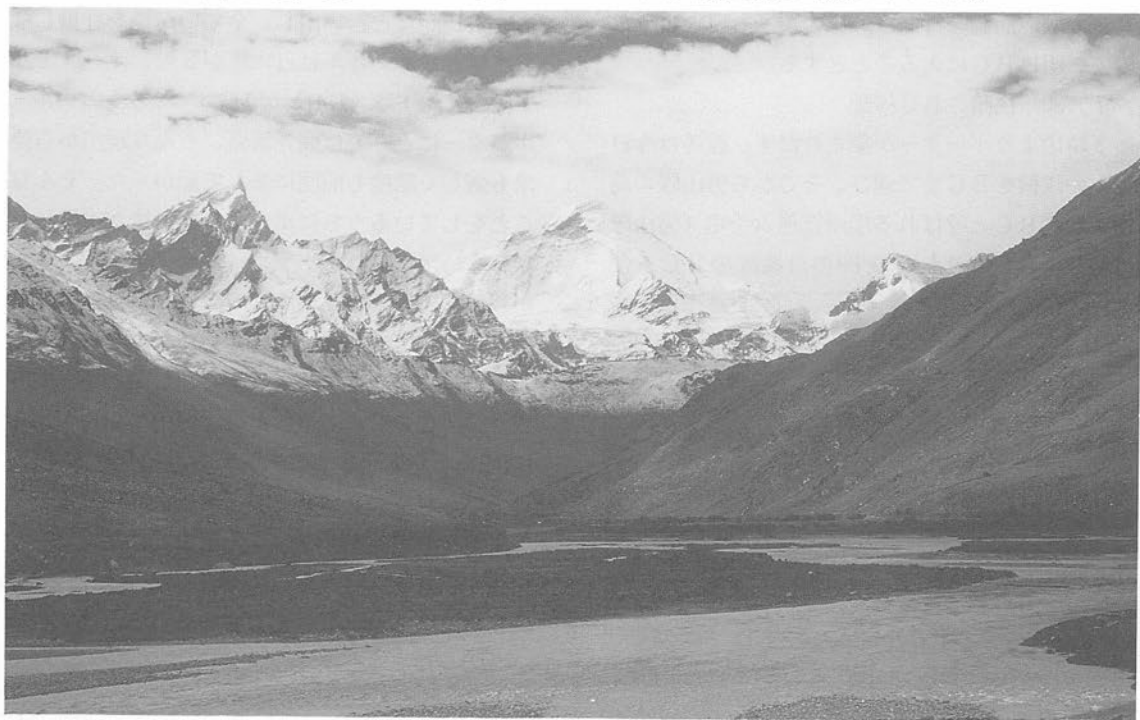
昼頃には雨もあがりカルギルの街に出掛ける。トーカイの100円ライター（60ルピー）や中国製の煙草が売られていた。気温が低く隊荷から防寒着を引っ張りだしてベッドで丸まっている隊員もいる。

夕方にはL・O達も戻り、明日はおそらくタンゴール迄行けるだろうと頼もしいお言葉。

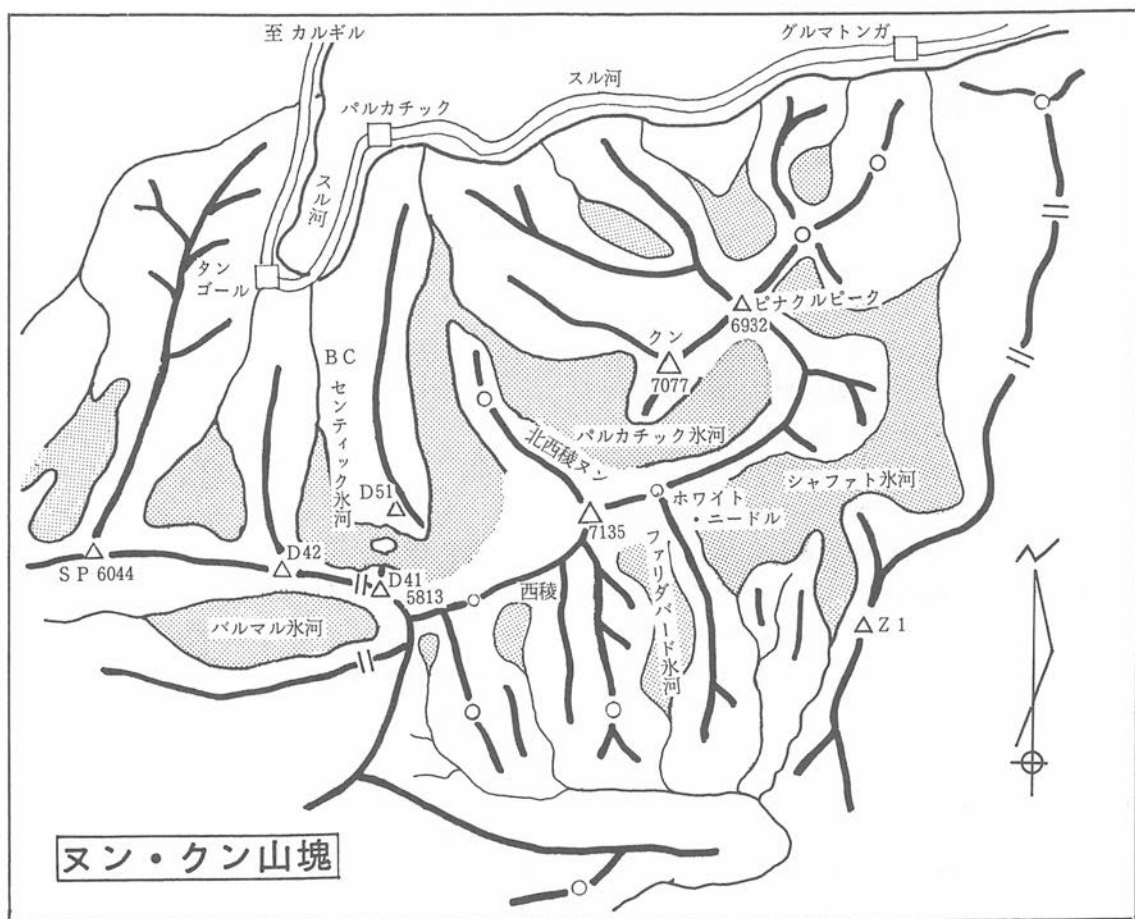
BCへ

7/29 曇り カルギル→タンゴール

7時半にホテルをスタート。カルギルの裏山の頭が白くなっているのには驚かされた。11時にはパニカルのチェックポストにつき、12時過ぎにタンゴール到着。オーストリア隊がテントを張っていた。彼等は2週間BCに居たが天気が悪くあまり登山活動も出来なかったらしい。また労山隊は昨日BCに移動したとの情報がはいる。この辺りも3,900mより上には雪が残っている（後に労山隊より聞いた話ではタンゴールでも5cmの積雪があったそうである）。我々が乗ってきたバスはオーストリア隊を乗せて帰っていった。



▲左からクン・ヌン・D51、パニカル手前から



昼食の後、キャンプ地の裏山を、800m位まで登って順応活動を行なう。皆の調子も良いようなので、明日BCに入ることとする。

7/30 快晴 BC移動

3時頃よりポーターが集まりだす。彼等は今日我々の隊荷をBCまで運び、そこから労山隊の荷物を台湾BCと呼ばれる場所迄運ぶ予定（労山隊は通常のBCよりも上の'89の台湾隊のBCを使



▲タンゴール部落とD51

用した)。ところが'93年には問題の無かった重量も一人15kgだと言出し、全ての荷物を計量しなす事となる。今年は日本隊が3隊、オーストリア隊とインド隊(D41)が1隊ずつとタンゴール・ポーターにとっては商売繁盛、そんな理由から要求も厳しく態度も前回にまして悪かった。そんなことをしているうちにポーターの最後が出発したのは6時半になり、タンゴールには40個程の荷物が残る。中川、中島(清)の2名が残り他の隊員は8時前に出発。早いポーターにダブルボックスをしてもらうことになる。しかし、なんといっても我々の荷をBCまで上げた後、労山の荷物もさらに上に運ぼうというのである、結局、全ての荷物は上げられず、プラパル・ボックス19個と若干のキッチン用品をスタッフ1名と共にタンゴールに残す。コック等とBCに到着したのは19時30分。夕食は21時30分になってしまう。雪を退けてテントを張った。

▼タンゴールの裏山を登る



登山活動

7/31 快晴 C1荷上げ

タンゴールでの順応活動をせずにBC入りしたために不調者がでるか心配したが、皆思いの外元気にテントからでてきたので安心する。

9時に出発の予定であったが、タンゴールからのポーターが到着しだったのでそれを待ち、出発は10時を回ってしまう。

労山BC迄は昨日のしっかりしたトレールがある。中川、中島（俊）の2名とハイポーター3名はC1まで、他の隊員は荷物を労山BCまで運んだのち、空身で少し上まで順応活動を行なう。C1（4,900m）の積雪は30cm。労山隊のデポキャンプがありトレースに助けられる。BCに帰り、夜はBC開きのお祝いをする。

8/1 晴れ BC休養

本日は全員休養日とする。

カルギルでの2日間の停滞以来動き続けて来たので、全員の疲労の回復を計るため、天気も良く洗濯などして過ごす。BC付近は大分雪も少なくなる。

8/2 曇り後雨 C1荷上げ

全員でC1へ荷上げを行なう。

6時半モーニングティ、7時に朝食、8時過ぎに各々出発する。雪もどんどん溶けて行く。労山BCまで2～3時間、そこよりC1までは早い方で1時間半くらいである。C1もようやく雪が消えてきた。労山隊は下部アイスフォールにルート工作をしていた。

夕食の席で明日からの予定が発表される。明日

から2パーティで行動する。

A隊 L中川、東條、中島（清）、中島（俊）

B隊 L樋上、中村、山岸、牧野、安藤、阿部、
酒井隊長

A隊は明日C1に入る事となる。

8/3 曇り

A隊は7時40分BCをスタート、11時にはC1に到着、12時にC1を出発する。アイスフォールには既に労山隊によりロープが張られていた。

今回、労山隊は北西稜を目指している。隊長の近藤和美氏とはルートが同じ下部アイスフォールについて、先行する労山隊のロープの使用を事前に了解を得ていた。立派なロープをたどりフィックスの終了点に荷をデポして下降する。2年前に比べると氷河の状況は確実に悪くなっている。酒井隊長を除くB隊はC1荷上げ。

夜、酒井隊長との交信でハイポーターの個人装備に問題があることがわかる。メンバーの装備を貸すことで解決することにする。

8/4 曇り時々ガス

3時起床、昨夜半雨が降る。5時にC2への荷上げに出発。7時には昨日のデポ地点にて荷を増やし出発。しばらく登るとクレバスが大きく口を開けており、スノーブリッジにロープが1本固定されていた。さらに20分程労山のトレールを辿ったあと労山のC1の手前で右に分かれ西稜を目指す。固いモナカ状の雪の膝位のラッセルで思うようにペースがあがらない。時折、ガスに視界を閉ざされる。標識を立てながら進む。10時前に'93年より少し手前の地点をC2（5,300m）とし、荷物をデポして下降する。C1にはお昼過ぎに到



▲下部アイスフォール

着する。隊荷の整理などをしてBCに下降する。

B隊とハイポーター（H・P）3名はC1入りする。

8/5 雨時々曇り

A隊はBCで休養。せっかくの休養日も朝から雨が降っている。それでも中川は雨の合間に頭など洗う、残念ながら洗濯は出来なかった。

B隊とH・PはC1を6時に出発、上はそれほど天気は悪くないという。正午にはC2への荷上げを終え、夕方5時頃BCに下りてくる。H・Pは明日もC1よりC2への荷上げ。日本での計画ではH・Pだけによる行動は不安があるため予定していなかったが、今回のH・Pには3回もサトパントに登った者もあり、ウツタルカシから来た3名は信頼できる様だ。

8/6 雨後曇り

B隊は本日休養。

A隊の4名はC1入り。アタック終了までBCには降りてこない予定である。上部用の衣類などを持つとザックが膨らむ。ゆっくりと午後1時にBCを後にする。登るにつれて雨は止んでくる。3時間程でC1に到着する。H・Pも予定どおりにC2への荷上げを終えていた。

悪天が続く中で

8/7 曇り日曇

3時起床、5時にC2を出る。スノープラトールも2度目となりトレールもしっかりするとかなり楽になる。9時にはC2に着き、テントを張って10時30分西稜ヘルート工作にむかう。

ベルクシュルントの手前より工作を開始、下部アイスフォールは登山隊のロープを使わせて貰っ



▲C2とプラトール

▼西稜下部、右下の点がC2



たために、今登山で初の工作となる。中島（俊）トップでスタートする。ここまで'93年に比べると新雪が多かったためにスノーバーを多く用意し、アイスピトンを少しBCに置いてきたが、スノーバーを埋めるほどの積雪はなく、案に相違してアイスピトンの世界であった。トップは苦勞してロープを延ばして行く。5P目より中川がトップを代わり、7Pでコルとなりそこに余ったロープをデポして下降する。この頃は曇混じりの雪が強く降る。5時頃にはC2に帰りトイレなど整備する。

B隊はC1に移動。H・PはC2に荷上げ。

8/8 晴れ後曇り時々雪

中川は朝少々頭痛がする。5時30分C2を後にする。8時に前日の最高到達点のコルに到着、ルート工作を開始する。朝からヌンの頂も良く見え、コルからはキシトワールの山々が展望できた。

中川が嫌らしいガラ場にロープを延ばす。大きな岩や残置ピンを使いながら進む。岩場のトラー

バースを終えると、漸くスノーバーが使える様になってくる。コルから9 P目で中島（俊）にトップを替わる。この辺りから雪が多く、悪雪のため手間取る。カニのハサミのトラバースを終え、2 P進んだところで午後2時となり、それぞれ荷をデポして下降に移る。今日中にC3に辿り着きたいと考えていただけに非常に残念であった。4時過ぎにC2に戻る。

B隊C2移動。H・Pプラトー手前まで荷上げの後BCへ下降。

8/9 曇り後雪

A隊の東條隊員は不調のためC2で休養とする。他の3名でC3へのルート工作。酒井隊長を除くB隊はC3への荷上げの予定で6時前に出発する。

昨日のデポを回収して進むが、少々疲れている様でいまひとつペースが上がらない。それでもさらに4 Pのロープを固定して、11時半にC3地点(5,850m)に辿り着く。C2から使用した固定ロープは25 P。



▲コルからの登り

▼上部アイスフォールへ



B隊は、不調の山岸隊員が固定ロープの取り付けより引き返し、他のメンバーもカニのハサミのトラバース前後に荷をデポして下降する。古い固定ロープを回収し、午後4時すぎにC2に帰る。この頃より雪となる。

8/10 雪後曇り

昨夜から今朝にかけて10cm程の積雪をみる。全員休養となる。休養日に限って悪天である。狭いテントの中でじっとしているのも辛いものだ。

今後の予定について隊長、副隊長、中川で話し合い、アタックを1隊、1回かぎりとする。そして、パーティ構成も東條隊員をA隊よりB隊へ、替わりに阿部隊員をB隊よりA隊に組み込むこととする。また、酒井隊長は登山の終了までC2から指示をする事となる。

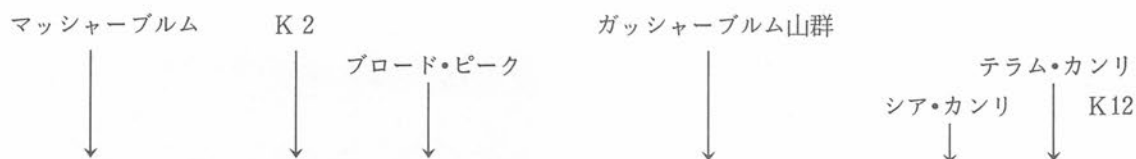
レー滞在中より今日まで、BCに移動した日とその翌日以外は全て降水をみている。後はただ天候の回復を願うのみである。

遠くカラコルムを眺めながら

8/11 曇り後晴れ



▲C3への下降



A隊はC 3 へ移動する。C 3 到着後11時30分C 4 へのルート工作に向かう。アイザイレンして進む、天気は漸く回復したが、今度はあまりの暑さと悪雪の為12時半ギブアップしてC 3 に帰る。夕方より本格的な天候回復を思わせる好天となる。

B隊はこの日C 3 へ荷上げ、安藤隊員は体調を崩してC 2 にステイ。

8/12 快晴

素晴らしい天気である。ナンガ・パルバットはもちろん、遥かにマッシャーブルムやK 2 まで眺めることが出来る。5時にテントを出る。昨日のデボを回収、2 Pクレバス対策としてロープを固定。のしかかってくるようなアイスピルディングの下を右上し、氷崖が現われた場所よりロープを固定する。アイスピルディングの上を2 P半左にトラバース、そこより10m程の氷崖を登り、今度は3 P右にトラバースをし、氷塔を回りこむようにして漸く上部スノープラトーに出ることが出来た。2年前に比べ、アイスフォールの状況は大分悪くなっている。下部アイスフォールも含めて氷河の体積が減少している様だ。

プラトーに出ると視界が広がり、キシュトワールの山並みが一望できた。念のためにザイルを結んで行動する。大きなクレバスを右から回りこみ11時前にC 4 (6,300m) 地点に着く。荷をデボ

してC 2 まで下降する。C 3 から固定したロープは9 P。

Bパーティーは休養日。中村、牧野両隊員はスキーでD41に登頂。見事なシュプールを描いて滑り降りてくる。

頂を目指して

8/31 晴れ夕方→一時雷雨

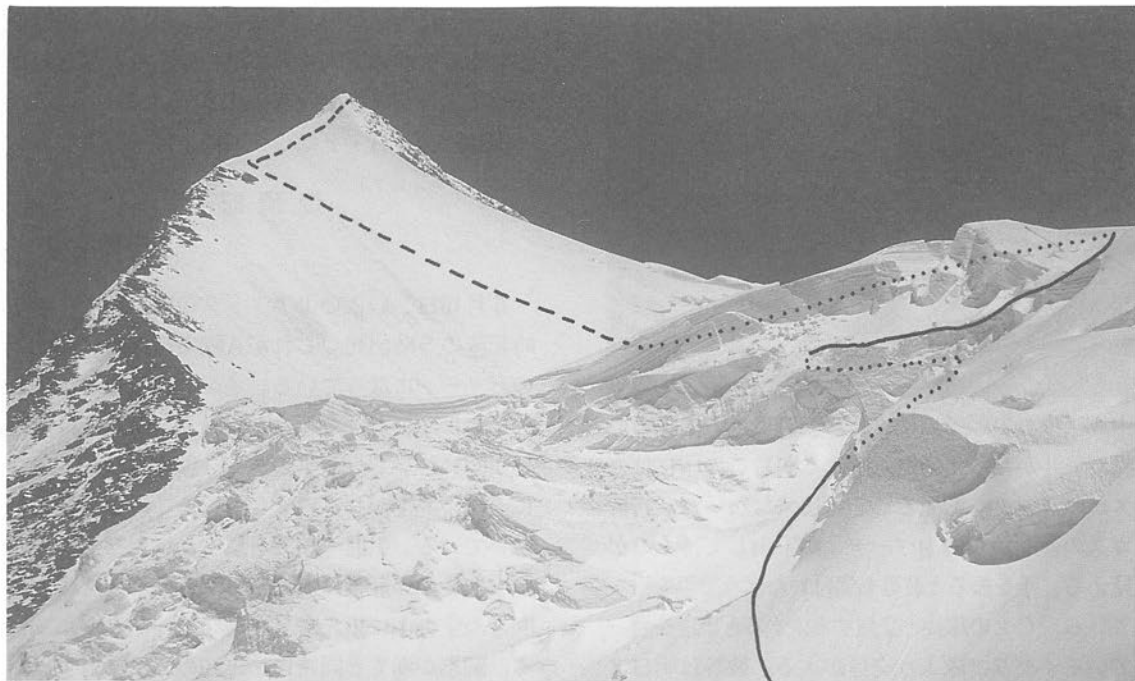
全員休養日。

酒井隊長よりアタックからBC迄の撤収の計画が発表される。山岸隊員、安藤隊員は荷下げ管理の為BCに下降。夕方4時前から激しくアラレが降り雷鳴が轟く。

BCよりD41を目指してインド隊が入山したことを知る。労山隊もルートがのびている。



▼カニのハサミからヌン、破線がルート



8/14 快晴

入山以来最高の天気の中、10時すぎA・B隊の8名はC2を出発しC3に向かう。好天の到来と共に気温が低下。雪も締まって歩きやすい。途中固定ロープを2Pナイロンに張り替える。順化も出来ており快調なペースでC3に着く。夕暮の西の空では稲光が賑やかだ。

8/15 快晴

A隊(中川、中島清、阿部、中島俊)は5時にC3を出発。8時前にC4に着き、9時半にキャンプを後にしルート工作に向かう。従来のHAJ隊同様南西壁にロープを固定する。北風が吹き、遠くカラコルムの山々が綺麗に見える。ただ、今までとは違い非常に寒い。20cm程の雪の下の水に支点をとる。今回ロープが短めだったので(通常1P50m)8P張っても西稜にとどかず、メインロープも1本張り、大岩まで25mを残して下降する。

C4は西日が遅くまであたりテントのなかはとても暑い。明日のアタックに想いを馳せながら8時前にシュラフに入る。

B隊(樋上、中村、東條、牧野)はC4への荷上げの後、樋上はC2まで下降。他の3人はC3に泊まる。

安藤隊員はH・Pと共にC1に移動。

8/16

3時起床、これまでと同じ5時少し前にC4を出る。アタックなのだから早起きしても良かったのだが、昨日の気温を考えると太陽の恵みが欲しいと考えた。今日も良い天気だ。昨日の固定ロープをたどり7時に西稜の大岩に着く。そこより中川と阿部、中島(清)と中島(俊)でアンザインをして進む。膝くらいのラッセルである。

北風が吹き寒さを感じる。カラコルムの山々が美しい。中川と阿部で交互にラッセルをしながら進む。西稜を14P進み、南西からの尾根が合流して尾根は広くなり、そこより3Pほど東に進むと尾根はやせ絶頂となった。阿部、中川、中島(清)、



▼西稜を登る



中島（俊）の順で頂に立つ。そこには労山隊の標識ポールがたっていた。残念ながらこの頃にはガスがわき、クンも見ること出来なかった。時折ガスの合間から労山パーティが下山して行くのが見える。手を振ると彼等も気付いたようで手を振っている。C2の隊長と交信する。すると東稜に登っているイタリア隊より交信が入る。彼等は明日アタックの予定だという。労山隊のポールに我々の赤布を結びつけ記念写真を撮り下降に移る。下り



▲頂上手前を登る中島清治隊員

も慎重にアイザイレンをしてスタカットで下りる。アイゼンに雪が付いて難渋する。思いの外疲労が激しくC3への下降を諦め、C4泊りとなる。B隊の3名はC3を撤収してC2へ。

安藤隊員とH・PはC2の荷下げを行なう。

登頂記

中島清治

8月16日、いよいよアタックの朝を迎えた。3時起床の5時出発。これがA隊では行動日の一つのパターンになっている。インドに敬意を払ったわけではないが、今朝はカレーうどん。外は快晴、星が瞬いている。前半の悪天を埋め合わせるように、後半尻上がりに良くなり、ここにきて好天が続いている。気温 -13°C 、思ったほど寒くはない。風もなく幸い好条件が揃ってくれた。ヌンはまだ明けぬ空の中に黒光りした姿をどっかと据えている。闘志が湧くと同時に、未知の高度に対する不安が脳裏をよぎった。

中川登攀隊長を先頭に、南西壁に張ったフィックスロープにそって登って行く。前日、登攀隊長と中島（俊）の二人が午後遅くまでかかって張り終えたロープは、目指す西稜の大岩まで後わずかのところで届いていない。最後はメインロープをフィックスしてある。8時前にそこまで辿り着いた。メインロープをはずし、さらに1本フィックスロープを延ばしたが、まだ西稜に出ない。登攀隊長と阿部両中島がそれぞれペアになり、そこからスタカットで登高する。あたりはすっかり明るくなり、眼下からはるか彼方まで陽を受けた雄大な景色が眩しく光輝き、気分がいやが上にも高揚する。ただ、ここはまだ日が射さず止まっていると寒い。足の爪先もジンジンしてきた。見通しが甘かったと薄着を後悔した。

西稜に飛び出した途端、北風が頬を刺した。稜上は風が強い、ピッケルとスノーバーを突いて身構える。顔を上げると、紺碧の空を背に目の前に1本の稜を挟んで両側に裾をひらいた純白の鍾形があり、先行する登攀隊長、阿部のペアがトレールをのぼしている。それにしても、なんて美しい雪稜だろう。南西壁と北西壁が鋭く交わり、まるで定規で引いたように一定の角度で真っ直ぐ頂上

に向かって延びている。ラッセルは深くないが7千メートルに近い雪稜では相当苦しいはずだ。それでも、先行ペアはペースを落とさず確実に登ってゆく。後に続きながら、心臓、肺臓をはじめ、体内のあらゆる機能がフル稼働しているのがわかる。精一杯酸素を取り込み、精一杯足を上げる。登るにつれ、酸欠で苦しさが増す。だが、一步一步がそのまま頂上に直接続くという喜びが、それを上回った。

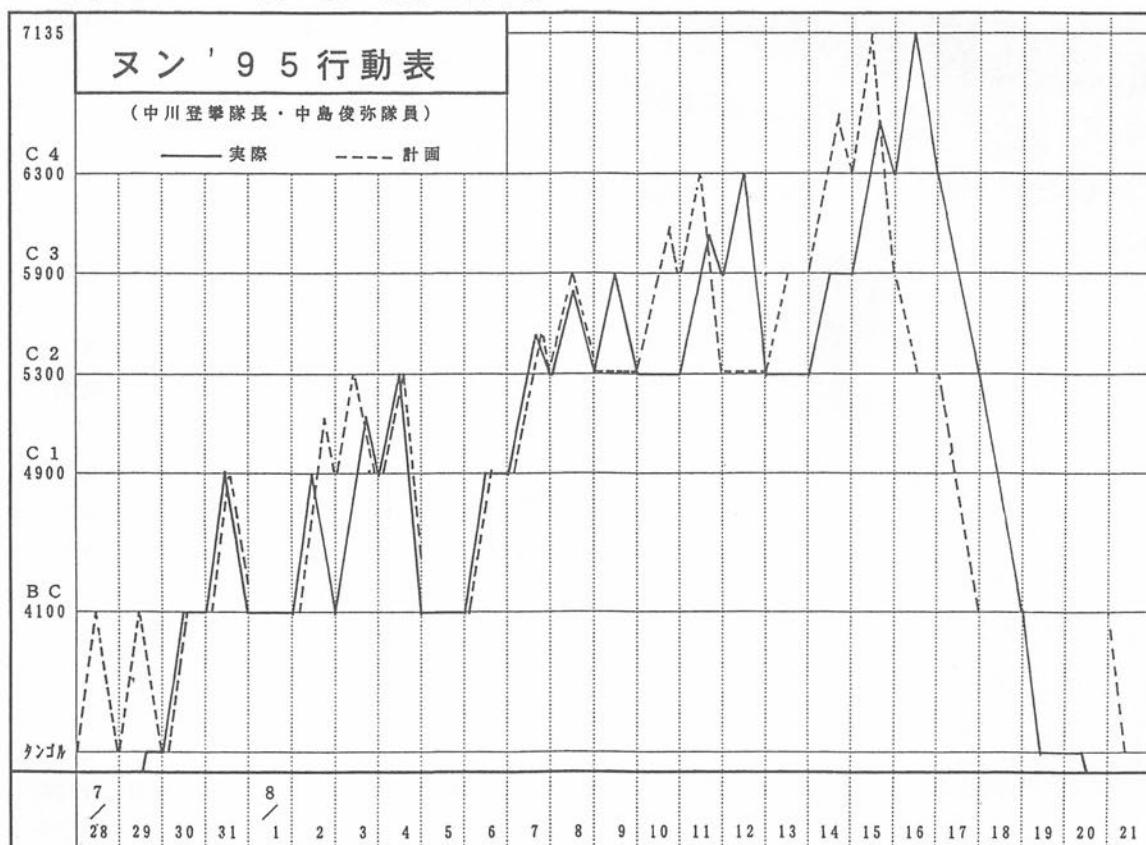
西稜に出てから12ピッチも登り、やっと雪稜にわずかに突き出た露岩に着いた。それを越えると短い頂稜を挟んで頂上はすぐ目の前だった。13時、とうとう念願のピークに立つことができた。先行した登攀隊長、阿部のペアに迎えられ、早速無線交信する。登頂報告の後、ただただ、感謝の言葉が隊員たちの口をついて出た。今回は前半の悪天に崇られ日程が詰まり、予定していたB隊のアタックが事前に取り消された。それを承知でC4まで黙々と荷揚げに動いてくれた隊員や、既に荷下げ作業についてくれている隊員。酒井隊長のもと、隊員一丸となって成し遂げた成功であり、言

▼登頂ノ左から中島（俊）、中川、阿部



葉では言いつくせない多くのことを学んだ。その気持ちが素直におもてに出た。

振り返れば、去夏一人でヌンに偵察に来た時、まさか、わずか一年後にそのピークに立つことになるとは思ひもなかった。色々な出会いがあり、様々な体験をさせていただいた。充実した一年間だった。改めて、出会った素晴らしい人たちにお礼を申し上げたい。本当にどうもありがとうございました。



思わぬアクシデント

8/17 晴れ時々曇り

A隊はC4を撤収してC2へ、途中C3からC2の間の固定ロープのうち10Pを中川と中島（俊）で外してC2に下ろす。

C2からは酒井隊長と牧野隊員はBCへ下りる事になる。ところが、牧野隊員はスキーで下降中下部アイスフォールで転倒。胸部を強打し、労山隊のH・Pに助けられC1に収容される。C1には安藤隊員がおりO₂パックで酸素を吸い、一晩様子を観ることにする。BCには酒井隊長、山岸隊員が泊まる。H・PはC2荷下げ後BCへ。

8/18 曇り後雪

C2の8名はC2を撤収してBCを目指す。心配された牧野隊員の容態はそれ程悪くはないとC1から連絡が入る。準備が出来たものから下降に移る。

我々がC1に着くのとほぼ同時にH・Pも上がってくる。牧野隊員もなんとか自力で歩行が出来そうである。安藤隊員とH・P1名に付き添って下



▲カニのハサミ下を滑る牧野隊員

▼回収した残置ロープ



りてもらう。H・Pには2往復してもらいC1の全ての荷物がBCに下りたのは夕方となる。すると、ガイドのアルンが明日タンゴールに下りるという。予定では明後日だが、今年の天候不順、低温により収穫の時期が2週間早くなりポーターの確保が難しい。さらに20日は労山隊が先にポーターの手配を済ませており、我々のポーター確保は困難である。したがって、明日中にタンゴールに下りなければ、20日のカルギルへの下山は不可能だという。大急ぎでテントを乾かし、コッヘルを洗ってパッキングをする。個装もボックスに詰める。そして、慌ただしく夕食となり最後の日本酒を開けて下山祝いをする。

北西稜を目指す登稜会隊が入山しており、我々のテントのすぐ上にBCを設営している。

8/19 晴れ

牧野隊員とL・Oは先に下りてカルギルの病院で診てもらうことにする。

6時半にポーターが12人上がってくる。皆子供である。午後にもたやってくるという。9時頃下りていった。ところが、2回目にやってきたポーターは8人しかおらず、しかも、午後3時を回っていた。その少ない子供のポーターでダブルボッカを繰り返してタンゴールに全隊荷が下ろされたのは、結局、夜の10時30分になってしまった。満足な食事もとれないままシュラフにはいる。

シカール社のバスは既に到着していた。

8/20 晴れ タンゴール→カルギル

カルギルへ。ビールと暖かいシャワーが待っている。お昼過ぎにホテル・ゾジラに到着、昼食の後、皆、街に繰り出しカバブや果物、甘いものを

▼BC撤収



食べていた。ドライエリアであるこの街ではカバブ片手にビールとはゆかず、それだけが残念。ホテルに戻り夕食と共にビールでノドを潤す。

牧野隊員もホテルに居り、軍隊の病院での診療の結果、骨に異常は無いとのこと。夕方、牧野と中川はカルギルの民間の病院に余った医薬品を寄付しに行く。日曜日のために医師は一人だったが、忙しい仕事の合間をぬって対応してくれた。

8/21 曇り後雨 カルギル→レー

大半の男性隊員が髭を剃り、すっきりした顔になり出発。7時にカルギルを出る。朝から雲行きが怪しかったがラマヌル付近から雨雲に追い付かれてしまう。ゴンパの観光を諦めレーを目指す。午後7時前に来たときと同じリンジ・ホテルに到着。夜、強い雨が降る。

デリーを目指して

8/22 曇り時々雨 レー→サルチュー

今日も怪しい雲行きだ。デリーを出発してから今日まで降水がなかった日は数えるほどだ。頂に立てたのは幸運であった。

6時半にレーを出発。ウプンには1時間程で到着。この頃より雨となる。インド人スタッフが朝食をとっている間、店の女性と言葉をかわす。彼女はネパール人だ。ここからマナリ迄の山岳道路は冬期には閉鎖され利用できない。短い夏の間、この道の所々にテント村が出来てドライブインの役割をしている。そして、テント村や道路の管理に携わっている者のほとんどがネパールからの出稼ぎである。

ウプンからインダス川を離れてヒマラヤ山脈の

▼マナリ～レー道路のテント村



縦断が始まる。気温も低く上部では雪に変わっている。南下するにしたがい雨も止む。

あいにくの天気あまり展望も得られずタンラン・ラ(5,328m)ラチェン・ラ(5,150m)を越えサルチューに陽が落ちる寸前に到着。テントを張る。日本ではちょっとお目にかかる事が出来ない夕暮だった。

8/23 晴れ サルチュー→マナリ

6時45分にサルチューを出発。バララチャ・ラ(4,891m)までいっきに高度を上げる。峠よりおりはじめるとムルキラが見えだす。そして、それまでの草木の乏しい荒涼とした世界から辺りは徐々に緑を取り戻す。ケイロンを過ぎロータン・パス(3,978m)を越えると景観は一変する。日本を思わせるような美しい緑が繁る世界に我々は帰ってきた。名も知れぬ花が咲き乱れるつづら折りを下り、夜7時半マナリに到着した。

8/24 晴れ後雨 マナリ→デリー

5時半にホテルを出発。我々を乗せたバスは夜が明けきらないマナリの街をデリー目指してひた走る。今日は長い一日になりそうだ。今までとは



▼デリーにて



異なり舗装された道でスピードもあがる。

午後3時すぎにチャンドニールで遅い昼飯をとる。久しぶりに入った中国レストランは残念ながらアルコール類のライセンスを持っていなかった。途中タンドリ・チキンを肴にビールをラッパ飲みなどをする。以前より酒屋の数は格段に増えた。デリーのカニシカ・ホテルに入ったのは11時を回っていた。

帰 国

8/25

本日の予定、酒井隊長と中川はL・OとIMFへ、他の隊員はデリーデポ装備の整理のためシカール社の倉庫へと向かう。IMFではD41の登山料を払う。

夕食はロータス・ガーデンという日本食レストランへ。料理のレベルは良いのだがここでもライセンスの壁にぶつかり、ビールすら飲む事ができず一同がっかり。ちなみに、コンノート・プレイスの商店街は今日からストライキに入っている。コンノートという名前をガンジー族の名前に変更させる政府の動きに反抗してのことらしい。おかげで我々は土産を買うのにも難渋した。

ホテルをジャンパトに移る。

8/26 晴れ

午前中は全員自由行動。

朝食時に会津のガングスタン隊と再会。お互いの成功を喜ぶ。昼食はシカール社の社長、S・クマール氏の自宅に招待される。帰りにクマール氏に紹介された紅茶の専門店に行き、非常に高い紅茶を買う。

そして夜、中川、阿部を除く9名が帰国する。

▼水浸しのコンノート・プレイス



残留の2名はパークホテルへ。

8/27 曇り時々雨

今日は全世界的に日曜日である。したがって残留組もデリー観光。チャンドニール・チョウクからガンジー博物館、ラジコットをまわる。マハトマ・ガンジーに対する評価は時代と共に変わってきたというが、彼の墓に花を手向ける人の波は途切れない。

8/28 雨

シカール社の倉庫でデポ品の整理とリスト作りを行ない、古い装備を廃棄する。道端で飲んだチャイがとても美味しかった。

夜は知り合いのネルー大学のP・モトワニ氏と食事をする。日本語が堪能なモトワニ氏にインドの現状を多く教えていただいた。ニルラでアイスクリームを食べ楽しいひとときを過ごす。

8/29 曇り時々雨

昨日でデポ品の整理もめどがついたので、雪と岩の会のサトパント・トレックパーティーと一緒にアグラヘデラックス観光旅行に行く。天気もかろうじてもち、良い思い出となった。

8/30 雨強し

目覚めるととんでもない土砂降りであった。さすがに1時間程で弱まったが、コンノートの中心部は水浸しとなる。シカール社の事務所まで道路だった場所を膝近くまで水に浸かりながら行く。スタッフに倉庫まで送ってもらい、新たなブリキの箱と鍵を買い、荷物をつめて作業を終了する。

午後は漸く営業を再開したコンノートで買物などして過ごし、夜7時にホテルを出る。そして、10時20分、我々を乗せた飛行機はインドを後に日本へと離陸した。

(文責：中川裕)

地域ニュース

《インド》

サトパント登頂

西部ガルワールのサトパント（7,075m）に挑んだ雪と岩の会隊（尾形好雄隊長ら4名）はモンスーンのひどい降雪に見舞われながらも9月13日に登頂に成功した。

登頂したのは尾形隊長（47）と岩崎洋隊員（35）の2名。

一行は8月21日にデリーを出発した後、リシュケシ、ウッタルカシ、ガンゴトリと車でアプローチ。ガンゴトリからはボジュバス、ナンダンバン、ヴァスキ・タールと3日間のキャラバンでBCを建設（先発2名のみ）。1日の休養の後、28日からC1への荷上げを開始した。後発の2名が29日にBC入りした後、9月1日にC1建設（5,100m）。翌2日と3日にかけて降雪の中をセラック帯のルート工作に出かけ2日間で10ピッチ、フィックスロープを延ばす。

4日から降雪がひどくなり8日迄停滞となる。

セラック帯の入口付近で2m近い積雪となった。この雪で隣接するバギラティII峰に挑んでいた韓国隊は隊員1名と高所ポーター2名が雪崩の犠牲になった。

9日より登山を再開し、深い雪に難儀しながら11日にはC2（5,800m）を建設。12日にC2上部のナイフ・エッジに10本のフィックス・ロープを施す。

13日午前4時にC2を出発した尾形、岩崎の2名は深いラッセルにアルバイトを強いられながらも1200m余の高度差を一気に登って13時35分に登頂。下りは登りの苦勞が嘘のような早さで、2時間50分でC2に帰着した。

翌14日、宮崎久夫（45）、安藤義則（30）両隊員がアタックに向かったが、6,300m付近で表層雪崩にまきこまれ、九死に一生を得た。この雪崩事故で2次隊のアタックは断念し、登山活動を終了した。

サラ・シュワ峰初登頂

ラダック地方の東南部に位置する未踏のサラ・シュワ峰（C.6,238m）の初登頂を目指した足利工業大学山岳部隊（沖允人隊長ら5名）は、8月16日に竹沢雄三（53）、高瀬浩紀（22）隊員と連絡官のA.R.Chaudhuryが初登頂に成功。

翌17日には沖隊長（60）と安間義之（41）、松崎高志（19）隊員も登頂し、全員登頂を果たした。

ストック・カンリ登頂

日本山岳会東海支部インドヒマラヤ登山隊（鈴木常夫隊長ら12名）はラダックのストック・カンリ（6,153m）に挑み、8月12日に柳原徳太郎登攀隊長（48）、水野起巳副登攀隊長（44）、田中守之（66）、小島清子（61）、鈴木富雄（43）、栗木哲茂（36）隊員と高所ポーター3名が登頂。

翌13日には鈴木隊長と渡辺くみ（59）、浜田好子（56）隊員それに高所ポーター3名が登頂した。

サセル・カンリI峰で大量遭難

インド登山財団（IMF）の情報によると8月下旬（日時不明）に東部カラコルムのサセル・カンリI峰（7,672m）を目指したインドの国境警備隊（BSF）の登山隊（ネギ隊長）は、I峰に登頂した13名が頂上からの下山中に雪崩にまきこまれて遭難。8名が遺体で発見されたが、5名は行方不明のまま。

バギラティ河にバス転落、49名死亡

9月20日、ウッタルカシからガンゴトリに向かった66人乗りのバスがバギラティ河に転落し、49名が死亡した。死亡した中には15名のインドの登山隊も含まれていた、と云う。

《ネパール》

ダウラギリI峰の栄光と悲劇

今秋のダウラギリI峰（8,167m）には日本隊が3隊同じノーマル・ルートの北東稜に挑んだ。

最初に登頂を果たしたのはチーム84隊（俵谷久

義隊長)で、4日に沢田隊員とシェルパの2名。次いで6日に俵谷隊長(45)とシェルパ1名。2人は3時にC3(7,300m)を出発し、15時30分に登頂。登頂後、7,500m付近まで下ったところで俵谷隊長が動かなくなり、シェルパ1人が23時にC3へ帰着。後日、7,600m付近まで搜索するも俵谷隊長は行方不明のまま発見できなかった。

一方、10月6日には雪豹同人隊(近藤和美隊長ら5名)の近藤隊長(53)と桑原巖(59)、武田澄人(30)、林孝治(43)の3隊員が登頂した。

また、同じ日宮崎大学隊(橋本詞央隊長ら9名)の成崎公生ら2名とシェルパも登頂に成功した。

アンナプルナⅢ登頂

アンナプルナⅢ峰(7,555m)に挑んでいた札幌北稜クラブ隊(斉藤勤隊長ら4人)は、10月2日に登頂に成功した。

登頂したのは斉藤隊長(47)とシェルパ2名。2日早朝、7,000mの前進キャンプを出発して南面から頂上を目指し、午前10時5分に頂上に立った。

北稜クラブは、1991年にも同峰に挑んだが、悪天で登頂を断念しており、今回の成功で雪辱を果たした。

トゥインズ登頂

ネパールとインドの国境に聳えるトゥインズ(ジンミゲラⅠ、7,350m)にネパール側から挑んだ東京農大山岳会とネパール警察の合同隊(山下康成隊長)は、10月16日に谷川太郎、吉田裕一、長久保幸司の3隊員とネパール側隊員ら8名が登頂した。ネパール側からの登頂はこれが初めて。

東農大隊は1963年春にも同峰に挑んだが、悪天候に阻まれC5(約7,000m)を最高到達点に断念している。

《中国》

シシャパンマに登頂

中国チベット自治区のシシャパンマに挑んでいたY・M・Sタートル倶楽部登山隊(小西政継隊

長ら6人)が9月26日にノーマルルートから中央峰(8,008m)の登頂に成功した。

登頂したのは小西隊長(56)、石川富康(58)、原田達也(60)隊員の中高年組と星野秀樹隊員(27)、それにシェルパ2名。義足で挑戦した松田宏也副隊長(40)の登頂はならなかった。

尚、原田達也隊員は、60才と5ヶ月の登頂となり、90年春に同峰に60才と8ヶ月で登頂した斎藤惇生氏に次ぐ高齢登頂者となった。また、石川富康隊員はこの登頂により、50才台で4つの8km峰登頂を達成し、ドイツのミハエル・ダッハーの記録に並んだ。

ラサの市内電話局番が三ケタに

チベット自治区の省都ラサ市の市内電話局番が6月25日から3ケタに変わった。これで中国全国の省級政府所在地の市内局番はすべて3ケタとなった。ラサ市の市内局番3ケタと同時に、ラサ市内の自動交換機の容量を1万回線増し、市内通話の全面自動化を実現した。

ルンポ・カンリとチョブ・カン延期に

韓国隊がこの秋に予定していた中国・チベットの2つの未踏峰ルンポ・カンリ(7,095m)とチョブ・カン(7,048m)登山計画は、諸般の事情により96年春に延期された。

《パキスタン》

K2大量遭難の続報

この夏雪が多く各隊とも苦労はしたが、8月12日スペイン隊は7,950m、アメリカ隊二隊とオーストラリア・ニュージーランド・スウェーデン三国合同隊は7,850mのC4へ入り、そこから一緒に頂上を目指すことにした。好天は続くと思われたので深夜7人は頂上に向けて出発した。スペイン隊のホセ・ガルセル隊長、ロレンソ・オルティス、ハビエル・エスカルティン、ハビエル・オリバルの4人が先行し、ニュージーランドのブルース・グラント、アリソン・ハーグリーブス、そして彼女が加わっていたアメリカ隊のロバート・ジョ

ン・スレイター隊長の3人が彼等に続いた。数時間後スペイン隊のガルセス隊長は寒さのためC4に戻りそこに滞っていたロレンソ・オルタス隊長と合流しC4で待機することにした。この朝ビンの首直下まで登り引き返してきたピーター・ヒラリー達は下降することにした。

頂上に向かった6人はカタロニアとオランダの残置したロープを利用してビンの首を通過し、午後6時オルティスとグラントが登頂、約30分遅れてオリバーとハーグリーブスが到達した旨C4に連絡が入った。頂上は無風好天だが寒さは非常に厳しいと言う。最後にエスカルティンとスレイターが登って来た。下降開始後、彼等との連絡は途絶えた。午後8～9時頃中国側から暴風が吹き、C4のテントは飛ばされてしまった。14日朝スペイン隊の2人はC3に向け下降したところ、7,400m付近でハーグリーブスの靴片方と血のついたハネス、ヤッケを発見、上部ガリーを見上げると三方向に血痕があり、6人はかなりの高さから三方向に分かれて落ちたものと思われる。300m下方

でハーグリーブスの遺体が発見されたが、周辺には雪崩の痕跡もなく、他の遺体も見つからなかった。惨事の詳細は不明だが、下降中に予期せぬ暴風に遭遇したことは確かである。ハーグリーブスを含む最少とも3人は8,500m付近の頂稜部から吹き飛ばされている。今回の遭難者のほとんどが8,000m峰の登頂者でもある。

今季K2では8人の犠牲者を出している。K2では1986年には13人の犠牲者を出しているが、今年8月13日には1日で7人(内1人は高山病)の死亡を記録、K2登山史上最悪の日となった。

K2は8,000m峰14座の中で最も難しく危険な山と言える。
(Jo'sef Nyka)

東京集会のお知らせ

11月の東京集会は、雪と岩の会サトパント隊の報告を予定しています。

日時 11月27日(月) 19時～

会場 HAJルーム(地下鉄東池袋下車4番出口)

東京新聞の本

登山のオールラウンド情報誌



毎月15日発売(日・祝日の場合は前日) 定価670円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からとお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は通常号116円、特大号124円です。年間購読料は8,480円で送料は当社負担です。お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

■第1特集

- 1月号★アイゼン、輪かん、スキー
タイプ別雪山山行
- 2月号 自然案内人と山を歩こう
山をもっと味わうために
- 3月号★全員集合/山スキー・フリーク
- 4月号 自然の源・針葉樹と広葉樹、
照葉樹の森を歩く
- 5月号★GWに楽しむ山
雪稜・新緑そして花の山
- 6月号 北海道の山と人
日高、大雪、知床をめぐる
- 7月号★読者がつくる夏山プラン
ファミリー賛歌
- 8月号 湿原の山旅
地図で探したとっておきの池満
- 9月号 私の好きな山小屋
近郊の山から北アルプスまで
- 10月号★HOW TO 紅葉の山を味わう
撮る、描く、遊ぶ
- 11月号 ローカル線の山旅
徹底ガイド付き
- 12月号 実践/雪山へのいざない
(入門編)

(★は特大号となります)

■特別企画

- 1月号「僕でも登れる？」
——冬のハケ岳を楽しむ
- 2月号「僕でも登れる？」
——アイスクライミングに挑戦
- 3月号「僕でも登れる？」
——尾瀬で山岳スキーに開眼
- 4月号「僕でも登れる？」
——これぞ岳人、春雪の西穂高
岳へ(12回完結)
- 5月号「アルプス・ツェルマット研究」
- 6月号「モンブラン一周トレッキング」
- 7月号「花のアルプス・ハイキング」
- 8月号「ドロマテの岩塔に遊ぶ」
- 9月号「南米ロライマ山にロストワ
ールドを訪ねる」
- 10月号「ニュージーランド——手付か
ずの自然を楽しむ」
- 11月号「海外トレックの王道・エベ
レスト街道に行く」
- 12月号「冬の北米、アウトドアライフ
最新事情」

東京新聞出版局(中日新聞) 〒108 東京都港区港南2-3-13 ☎(03)3740-2674
書店で発売中。中日新聞販売店でも取りつぎます。

3-1 チョゴリ(喬戈里 Qogir)

*山脈:カラコルム山脈。

*位置:カシュガル(1289m)の真南約375km。

[35° 52' N、76° 30' E]

*アプローチ:カシュガルがスタート地点である。

カシュガルまではウルムチから飛行機で2時間の旅。南のパキスタンからフンジェラ峠を越えて入山する場合もカシュガルへ集合する。カシュガルからイエチェンを経てアカズ峠(3300m)、セラク峠(4900m)を越えてマザー・ダラまでは車で2日間。マザー・ダラからラクダのキャラバンになるが、4日目にアギール峠(4780m)を越えてシャクスガム河に降りる。2日間でインホンタンと呼ばれる紅柳などの群落のある幕営地に着きこがBCとなる。実質的な登攀のBCはチョゴリ氷河の中に2つのデポを作り、北稜の取り付け付近5000mになる。尚、氷河の第一デポまではラクダが使える。

*ルートの所要日数:現在1982年日山協の北稜ルート、1990年の横浜の北西壁ルートがある。

*山の概念:主峰8611m。

*通常の登山時期:シャクスガム河の渡河の関係から6月~8月の夏期。

*山名:[高く雄々しい山]の意。

*小史:1887年のヤングハズバンドが西洋人として初めて北側のチョゴリ(K2)を見た。1937年シプトンがチョゴリ氷河に入る。1976年7月于良撰ら6名が入山東北稜を偵察。1977年4月偵察隊(劉大義隊長ら22名)が入山。王鴻宝らが北東稜6000mまで偵察した。

*参考文献:岳人400号[東京新聞出版局 昭和55年刊] 人民中国357号[1983年3月号] 地図の空白部[1967年6月刊]

登山の概要

1981年

9月~10月 北稜 日本山岳協会隊

初めて登山隊として偵察のため入山9月23日インホンタンにBC設営。チョゴリ氷河のルート偵察を行い、北稜を10P試登した。

[隊長:小西政継(43) 原田達也(47) 坂下直枝(34) 佐藤英夫(32) 落合守和(32)]

1982年

4月~9月 北稜 日本山岳協会隊

5月6日インホンタンにBH設営。33名の支援隊によるBCへの荷上を行い6月7日4900mにBC設営。これから先は隊員のみによる無酸素登山を実施。8月1日北稜の7850mにC4設営。14日坂下直枝、柳沢幸弘、吉野寛、尾崎隆の4名がアタック。尾崎は登頂断念。残る3名が北稜の無酸素初登攀に成功した。しかし3名共8350m付近でビバークとなる。翌日固定ロープまで下降した柳沢が北壁側に滑落死亡した。15日にも高見ら4名が登頂に成功した。BH撤収の前29日医師の坂野俊孝が裏山で疲労凍死した。

[隊長:新貝勲(51) 小西政継(43) 高見和成(36) 重野太肚二(38) 川村晴一(34) 坂下直枝(34) 佐藤英夫(32) 吉野寛(31) 尾崎隆(29) 柳沢幸弘(26) 落合守和(32) 坂野俊孝(37) 支援隊隊長:原田達也(47) 辻美行(34) 禿博信(30) 岡野孝司(31) 森本学(32) 柿下哲雄(32) 橋本利治(31) 岩本敏巳(29) 高山孝一(29) 堀江泰仁(25) 今村裕隆(23) 浜修一(24) 花田政一(22) 池内功(29) 木村辰夫(29) 成田嘉治(27) 井上茂(28) 奥村孝(26) 長島基(22) 松本卓巳(28) 武川俊二(27) 二村秀広(25) 山下勉(29) 関崎健弘(26) 川那辺一(24) 星野貢(34) 佐々木慶正(27) 増島達夫(29) 上栗優一(24) 山中保一(29) 中尾登志夫(31) 荒井和夫(30) 伊藤昭司(32) 報道:今井幹雄(43) 山田新(36) 白井久夫(49) 落谷龍夫(48)]

[喬戈里峯登頂記(昭和57年12月刊) チョゴリ

への道（昭和57年12月刊）砂漠と氷雪の彼方に（小西政継・1983年9月刊）タクラマカン
の彼方・チョゴリへの旅（佐々木慶正・ヒマ
ラヤ131号）

7月～8月 北西壁 ポーランド隊（パキ）
パキスタン側から越境し北西壁に入り、8200
mで断念。日山協隊からクレーム。

1983年

4月～9月 北稜 イタリア隊

C 4を8100mに設営し、7月31日A.ポレ
ンツァとJ.ラコンチャイの2名が登頂したが、
ビバークとなった。8月4日にも2名が登頂。

[隊長：F.サントン(44) A.ポレンツァ(28) J.
ラコンチャイ(32) M.クライス S.マルィニ
F.ステファニー G.マルチ G.ドナ B.
ドナ M.ラセデリー R.メナデ M.コロ
P.ピニ M.プレティ A.ガンビシ R.モロ
J.ノバク K.ディムベルガー 他]

1986年

5月～8月 北稜 アメリカ隊

6月3日インホンタンにBC設営。8月4
日に2名が8100mまで達したが悪天のため断
念。南側のK 2で起きたブラック・サマーの
悪天候につかまり結局登頂に失敗した。

[隊長：L.オーエンス G.ロウ D.チーズモ
ンド C.クィーン A.ロウ G.クラウン C.
フリーア]

1988年

5月～9月 北稜 フランス隊

5月21日インホンタンに到着。6月8日49
00mにBC設営。25日7600mにC 3を設営。
3回のアタックを行ったが、8100mが最高到
達点となった。

[隊長：ピエール・ベジャン(37) アニー・ベ
ジャン(F39) ジェラード・プレティン(41)
フレデリック・バレット(23) フランソワ・マ
ルシニ(28) ピエール・ロワイエ(37) ジャク
ス・バルレ(40)]

1990年

4月～9月 北西壁 横浜山岳協会隊

5月11日インホンタン到着。6月8日BC
を5000mに設営。北西壁にルートを延ばし7

月4日にはC 3地7200mまで到達したが雪崩
事故のため中断。31日7650mのC 4地まで到
達する時間がないため北稜を越えて頂上雪
田にトラバースすることになる。8月9名塚
秀二、今村裕隆、鎌田健二の3名が頂上アタッ
クしたが途中で鎌田の酸素が無くなったため
2名で続行。19時から20時に登頂し、翌日午
前2時にC 5に降りた。

[隊長：岸本五三男(51) 植木知司(59) 福島正
明(39) 名塚秀二(35) 今村裕隆(31) 鎌田健
二(29) 岸順之(43) 熊谷豊(41) 渡部弘(29)
小村恭子(26) 土屋恒篤(55) 星野渉外(27)]

[聖域の巨峰—喬戈里峰北西壁初登攀の記録—
(平成3年8月刊) 喬戈里峰(K 2) 登頂
の記録(今村裕隆・ヒマラヤ229号)]

6月～9月 北稜 アメリカ／豪合同隊

7月4日BC設営。7600mにC 2設営。19
日に横浜隊のC 5に泊まった4名は途中で1
名が脱落したが、チャイルドら3名が19時頃
登頂した。

[隊長：スティーヴ・スウェンソン、フィル・
アーシュラー、グレッグ・チャイルド、グレッ
グ・モーティマー、ライル・クロス、ピーター・
コイストナー、マーガレット・ワーナー、]

1991年

6月～9月 北稜 イタリア隊

7月3日BC設営。6500mにC 2を設営し
アルバイン・スタイルに切り換え、7950m付
近から頂上雪田には入らず北稜をそのまま直
上し8200mまで到達しビバークしたが、降雪
が始まり断念した。無酸素。

[隊長：ファビオ・アグスティニス、ロマーノ・
ベネト、アルベルト・ブゼッティーニ、フィ
リッポ・ザラ、セルジオ・コセッティーニ、
マルガリータ・モネゴ(F)、オズヴァルド・
ストフィフ、ルシアーノ・ベチリ]

5月～7月 北西壁 フランス隊（パキ）

パキスタン側からの登山。6月30日BCを
設営。サヴォイア氷河から北西稜を登り7000
m付近から中国側へトラバースした。北西壁
に入り横浜隊のルートを登り北壁頂上雪田か
ら8月15日ピエール・ベジャンとクリストフ・

プロフィが登頂した。

1993年

6月～8月 北稜 スペイン隊

6700mにC2を設営。アルパイン・スタイルで登り31日アタックしたが頂上雪田8000mを越えたが断念した。

[隊長：フェリックス・イニユラテギ、アルベルト・イニユラテギ、ヨセバ・ウラキア、ヨアン・アンドレ・ロイデ、フェルナンド・ウリベサルゴ、コンチ・ゾフィア、ケパ・マティス]

7月～9月 北稜 ロシア隊

7月17日3800mにBC設営。29日6500mにC3を設営したが、6800mに達して断念した。

[隊長：ウラディーミル・バリベルディン(44)アレクセイ・クリミン(34) エレナ・グルシュコ(F33) ニコライ・ジュラコブスキ(28) リ

シヤルド・トレス・ネバ(39) フォルガン・グ・コノチェンハウアー(52) ハンス・ステマイヤー(42)

1994年

6月～8月 北稜 スペイン

7月30日C4からアタックしたホセ・カルロス・タマヨトとデ・ラ・クルスが14時15分登頂した。8月4日にも2名が登頂したが帰路ビバークとなりアチョ・アペリャニスはC2で衰退のため死亡した。

5月～8月 北稜 英／米合同隊

5月下旬にBC設営。7月26日にアラン・ヒンクスがスペインの2名とアタックしたが8100mで断念した。

5月～8月 北稜 イタリア隊

上部で北西壁から北稜8500mまで登った。

3-2 ガッシャールム I (加舒尔布鲁木 I Gasherbrum I)

* 山脈：カラコルム山脈。

* 位置：[35° 43' N、76° 41' E]

* アプローチ：シャクスガム河まではチョゴリと同じ。上流に3日間でBC到着。

* ルートの所要日数：未登攀

* 山の概念：主峰8068m。

* 通常の登山時期：シャクスガム河の渡河の関係から6月～8月の夏期。

* 山名：[輝く壁、素晴らしい峰] の意。

* 小史：1889年ヤングハズバンド、1926年メスン、29年のデジ、35年のフィッサー隊、37年シプトン隊などがシャクスガム河の上流に入った。開放後は1982年に写真家の白川義員、イタリア隊などがシャクスガム河上流を撮影した。1986年には中国も調査に入り「CHINA'S KARAKORUM GLACIERS」と題する写真集を出版した。

* 参考文献：シャクスガムの遥かなる峰（宮城県山岳連盟・1990年1月刊）地図の空白部（1967年6月刊）

登山の概要

1989年

4月～6月 偵察 横浜山岳協会隊

初めて偵察のため入山。5月ウルドク氷河からサガン氷河に入り東稜を偵察。その後G I 氷河からナクボ氷河を偵察した。

[隊長：福島正明 (38) 玉田仁 (36)]

[最後の地図の空白部（福島正明 2）山と溪谷 650号 1989年9月号、G I 東稜に新ルート（福島正明）岳人507 1989年9月号]

6月～9月 東稜 宮城県山岳連盟隊

6月13日BH設営。8月4日に東稜上の6100mにC5を設営したが、ルートが悪く登頂を断念した。

[隊長：八嶋寛(39) 大友幸一(41) 後藤真(40) 小野寺光義(43) 志小田清光(33) 工藤一(40) 小野睦男(34) 鈴木敏充(31) 加藤さゆり(31) 我妻邦夫(29) 相澤敏信(29) 中川直樹(28) 跡部隆(26)]

■ 寸 感 ■

先日長崎の古い会員である岡田伊佐男さんから
停年を期にと終身会員への移項の申し出があった。
1975年の入会であるからH A Jに20年在籍してい
ただいていることになる。ありがたいことである。
同時に10月16日から99日間に及ぶネパール・ヒマ
ラヤの登山とトレッキングの計画書が送られて来
た。岡田さんの一人旅の計画である。

目的として①ヒマラヤ巡礼、②還暦記念6,000
m峰登山、③ネパールの人と親交を深める、など
があげられている。計画書は日程、費用算出など
詳細に作られており、計画を練り上げる時間がい
かに充実していたかをうかがい知ることが出来る。

停年退職を機に、インド、パキスタン、ネパ
ールなどのヒマラヤ諸国で生活したい、という話を
聞くことが多くなった。事務所にいると時代は変
わりつつあることを感じる。 (Y)

事務局日誌 (10月)

1日(日) 群馬岳連、山田昇記念杯(山森)

- 3日(火) 中日新聞よりシシヤパンマ照会
- 4日(水) 雲南探険娯楽旅行社来会協議
- 9日(月) ヒマラヤ288号発送
- 10日(火) 共同通信よりダウラギリ登頂照会
- 11日(水) 読売新聞、時事通信よりダウラギリ
遭難照会
- 14日(土) J A C創立90周年式典(遠藤会長)
- 17日(火) 毎日新聞よりトゥインズ登頂照会
- 30日(月) 東京集会(15名)

ヒマラヤ No.289 (12月号)

平成7年11月10日印刷 7年12月1日発行

発行人 稲田 定重

編集人 山森 欣一

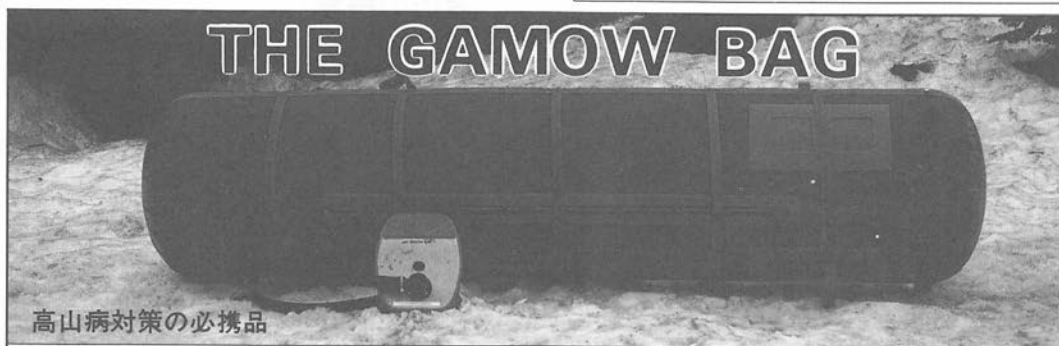
発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7

萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、
高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたを
そろって力強くサポートします。

●ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)

●パルスオキシメーター

(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR

EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——
あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる高みへ

個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア



株式
会社

西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)1391(代表)

キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)8384(代表)

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU, NEPAL ☎221707

運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェアー館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブラーカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブラーク3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メルオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004